

J.G.ズルツァー著『子どもの教育と教授に関する
試論（増補第2版）』

IV

上 畑 良 信

第6章 子どもの悪い傾向性および情念の抑制について

前の章では、子どもに善い性質を教え込む方法として、模範による方法と訓諭による方法とを取り上げて述べた。引き続きここでは、子どもの〔感覚的・衝動的な欲求に起因する〕悪い「傾向性」(Neigungen)と激しい「情念」(Passionen)の抑制のし方への論及が欠かせない。だが、それらの抑制には特別な技術が必要となるだろう。そもそも人間は、生後の経過のなかで現れ出る実際の姿と比べてみれば、はるかに善い傾向性を備えもって誕生するといわれるが、確かにこの点では私も見解を同じくしている。しかし、誕生後は実際に教育(Erziehung)による援助を通してはじめて、多くの天賦の素質がその人自身のものになるのであり、教育に恵まれない場合にはそれらが損なわれ捨て置かれたままになりかねない。もしも自然そのものに守られてその揺籃のなかで生まれ、しかも人間の手によって損なわれなかった子どもがいるとしたら、きっとどんなにか優れた人間になることだろう。だが〔現実の世界を見てみれば〕、概ね整った五体をもって生まれる子どもがいる一方、なかには身体上の障りをもって生まれてくる子どももいる。それと同様にまた、生まれついて精神の不具合をもつ子どもも見られるのである。これらの場合には、よい教育が施されることによって心身の改善が図られるように人は努めなければならない。いずれにしても、実際に年少期の躰しつけ(Zucht)が委ねられた大人で、子どもをその最初の自然本来の姿に保ち続けられる者はめったにいないのである。そのため、たいていは多かれ少なかれ人間の手が加わることによって子どもを損なってしまうのが実情である。そうであるなら、既に毀傷を受けた子どもを再び善い状態にする必要があるのであり、また人はそのような仕事を幸運と思って喜んで

引き受けることは稀であるので、こうした仕事には特別な技術が求められるということなのである。私がここで提案する〔子どもの情意教育と徳育のための〕諸規則が、予め損ないを被ってしまった子どもをはたして立派な人間に育成するのに十分なものであるかについては、読者および経験ある人びとの判断に委ねたいと思う。

ところで、ここで私が子どもの善良でない性質の傾向性および情念について語る場合、これらの性向が悪い習慣を原因として発生していることに特に注意しておきたい。悪い習慣というのは駆逐することがとても容易でないものである。それと同様に悪い傾向性や情念は時間の長さによって本性の一部となったものと考えてよく、しばしば単なる習慣よりも厄介な事態を招きやすい。子どもが不心得な悪癖をもつ場合、実際に他でもなく単なる習慣が原因でそのように不品行になったのか、それともそれが何らかの傾向性に起因しているのかを人はよく識別しなければならない。例えば、単なる習慣によって子どもがたびたび嘘をつくのか、身についてしまった虚言の傾向性から嘘をつくのかを分けて考えなくてはならないのである。最初の場合には、習慣がわざわざ彼をそう駆り立てただけであり、子どもにとって嘘それ自体はまったく彼の重要な関心事ではないのである。だから、彼の習慣をやめさせることは容易に可能といえる。これに反して、後者の場合には、より一層の注意が必要となる。というのは、われわれは習慣だけでなく、子どもの有する善くない傾向性そのものに対して厳しい判定を下すべきであり、これらの傾向性を何はさておき取り除かなければならないからである。

一般に、悪い性質の傾向性の抑制のために試みられる三つのやり方が知られている。(1)〔道徳的な〕非難・異議による方法〔例えば、叱ることや叱咤・訓戒など〕⁽¹⁾。(2) 繰り返しの練習による方法。(3) 不快な事柄への抵抗〔防衛的葛藤〕を活用する方法。このそれぞれのやり方について、少し詳しく説明しておきたい。

情念とは何か、それはぼんやりとした認識のまま好悪の表象を受け取ったわれわれの心的領域の、一定の事柄〔または人間〕へと向かう強い傾向性または〔感情を動かす〕激しい欲望（Gelüste）を意味する。それゆえ、これらの場合に判断を誤る粗悪な情念を合理的に取り除くべきだとすれば、まず第一には、精神が欺かれて受け入れた思い違いの想念をその真実の姿で解き明かし、他でもなくそれが実際的な禍害をもたらすことを悟性の力で顕わにさせなければならない。他方で第二には、精神が情念に屈してしまう、その人の長く続いてきた習慣をやめさせることが欠かせない課題となる。だが、最初に挙げた悟性の力だけで十分といえないことは、人の心の習慣がきわめて強力であり、たとえ悟性が働いて拒んでもそれを跳ね返し、しばしば意志をも自在に動かしてしまうことから明らかなのである。〔ローマ

の詩人オウィディウスの)よく知られた言葉でいえば、「私はより良くて、かつより安いものを求めた結果、より一層ひどいものを手に入れてしまう羽目になる」、あるいは「私は自分の欲する善を行なうのでなく、結局のところ私の望んでいない悪を為す」、という顛末になりやすいのである⁽²⁾。このように悟性が十二分に働くためには、道徳的非難・異議の表象の助けを借りてその機能を補わなければならないのである。ところで、この方法には二つの種類があり、それが根拠の伴う道徳的非難によるか、それとも根拠を伴わないものによるか、のいずれかが考えられる。私は最初にまず、後者の場合について述べることから始めよう。

根拠を伴わない道徳的非難・異議を象徴する人の働きかけとは、例えばわれわれが抑え込みたい傾向性に対して「嫌悪」(Abscheu)の表明をしたり、「嘲笑」(Spott)したりすることである。あらゆる機会をとらえてわれわれは自らの態度、言葉そして行動によってそれらの情念への嫌悪を子どもらに喚起するように努めなければならない。ユダヤ人が豚を〔不浄な生き物として〕扱うときのように、しばしばそれを話題にしなければならない。あるいはまた、ときにはひどく滑稽さを際立たせる側面から情念に照明を当てて嘲笑の手段に訴えなければならない。これらの方法がどのような効果をもたらすかは、容易に理解されるだろう。すなわち、それは自己の内面に新鮮で善良な傾向性を呼び覚まし、その善なる性質は対極に位置する邪悪な傾向性に対して火花を発して挑み、抑え込もうとする。人が表明する侮蔑(Verachtung)と嫌悪は、このようにして「自尊」(Ehrbarkeit)ないしは「真の名誉」(wahre Ehre)の感覚を覚醒させる。侮蔑されたくない者、そして自尊の諸規則に逆らう振舞いをしたくない者は、内からけしかける傾向性の衝動を克服すべくあがきながら努力することになる。そのとき、嘲笑は人が十分に強く心を揺さぶるし方で用いるならば、はむかい^{あらが}抗う情念を抑制する名誉欲求を覚醒させてくれるのである。

上に述べたことからまた、この嘲笑という手段がいつどのように用いられるべきか、そしてそれがどんなときに効果があり、どんなときに効果をもたらさないのかが容易に判明する。その手段は、例えば^{いま}未だ年少の子どもの場合のように、もっぱら根拠を理解する対処にまだ適さない者に使用するか、あるいは知的判断に乏しい子どもに対して用いるのでなければならない。だが、成長して思考力のある子どもの場合には、言うまでもなく最初に根拠を端的に示してやらなければならない。というのは、このような者にもしも強く当たるならば、理由なく不当に軽蔑や嘲笑が行なわれたと思ひ込むであろうし、かりに嘲笑の言葉を投げかけたとしても、いつだって気にもとめないで済みますか、たびたび立腹を呼び起こすだけになる。

だが、この嘲笑の手段が本当に効果を発揮するならば、必ず真の名誉や自尊の感覚、名誉感情が子どもの側に育っていくはずなのである。というのは、これらの感情は善良でない傾向性に対抗するものとして人が覚醒させておかなければならない、〔内なる葛藤の〕闘士（Streiter）となるものだからである。だが、軽蔑や嘲笑にまったく鈍感な者は、このような手段によって改心させることは望めない。それだから、あの有名な作家ホルベルグは、私がここで述べているような人物について、「いわゆる善人ぶる人間は態度を改めさせようと迫っても簡単に改悛することがない」と指摘した上で、「最も油断ならない人」と述べている⁽³⁾。ついでに言えば、私は私的教育以上に公教育の推奨されるべき理由がまさにこの点にあることを指摘しておかなければならない。というのは、私がここで挙げた諸感情は、私的教育よりも公的教育の配慮のもとで、一層強く呼び覚ますことができるものだからである。それなので、人はこの最も繊細なもの、すなわち自尊と名誉欲求の感情を、それがよいものである限りにおいて、子どもの内面に保持する努力を怠らないようにつねに心掛けなければならないのである。なぜなら、これらの名誉に関わる感情は悪い傾向性の抑止において立派に寄与するものだからである。しかし、そのためには私がすぐ前の章で示したような手立てをうまく活用しなければならないであろう。

また、これらに関連してしばしば引き合いに出される次の手段は、人をそれまで興味のなかった物事に熱中させるように仕向けることによって、性質の悪い傾向性を遠回しに拭い取ってしまう方法である。人が苦勞してやり遂げるべき重要な事柄に対しても、このやり方で子どもの大いなるやる気を惹起させることに努めれば、例えば「怠惰」（Trägheit）の習慣であっても消し去ることが可能となる。そうすれば子どもは何でも前むきに立ち向かうように努力するであろうし、やる気を出して働こうとするであろう。そして、十分に長くこの善い傾向性の性質に親しませておくなら、次第しだいに彼らは勤勞意欲そのものを最終的に獲得するにいたるのである。「自然はつねに再び芽吹くこと必定。さればこそ火と剣をもって自然を退治すべし」と述べたホラティウスの教え⁽⁴⁾は、いつでも正しいというわけではない。なぜなら、私が論じているような方法をとれば、生まれつきの怠惰な傾向性でも完全に消えてなくなるということがしばしば起こるからである。

私は快樂に溺れ、遊興にひどく心惹かれていた一人の青年を知っている。彼の家庭教師はその青年に幾らかのきっかけを準備し、古代ギリシアの歴史物語と古美術への著しく広範な欲求を彼のなかに呼び起こすことに成功した。以前のその悪習は大きな苦勞がなくては、ならびにまた言語（古典語）の習得がなくては追い払うことができなかつたものである。賢明な家庭教師は、彼の弟子に課業を引き受けさせ、

徐々に勉学を愛好する趣味を養っていった。なによりもまず、その学習はギリシアの歴史への知識欲を満足させるのに役に立ったが、それだけでなく、その継続のなかで彼は新たな意欲を駆り立てるさまざまな事柄に出会うことになった。とうとう最終的に彼は、学問のあらゆる分野に関する深い趣味を身につけることになり、自分の大事な人生を活動に満ちた、そして落ち着きのある生活へと一変させるまでにいたった。ここに挙げた事例は、事情の似かよった他の場合にもまた適用が可能だろう。

さらにまた、別の一つの個別事例を挙げよう。私はときどき根拠を伴わない道徳的非難による方法を用いて良好な効果を得たことがあったのを思い出す。しかも、それは実際に子どもが激しい感情に襲われてしまったときであった。ある一人の子どもが他の者から侮辱の言葉を投げかけられて腹をたて、報復しようと相手に非難を返し、悪態をつき始めたことがあった。その子は仕返すことに躍起になり、侮蔑者と仲直りするなどとは決して望まなかったのである。〔さて、この状況下で子どもをどう指導したらよいか。〕まずは子どもの言い分に理解を示す様子で歩みより、親しみを込めて声をかける。その後で、突然意表をつく調子で次のように語りかけてみる。「坊や、きみが寛大に振舞って侮辱した子を赦してあげるとしたら、どんなによいだろうねえ」。「どうだろうか、一度思い切って話しかけてみることを考えてみては」。「その子にしても、たぶんそれほど悪意があって言ったのでなかったかもしれないのだよ」、等々。このように子どもを叱咤する言葉をふんだんに駆使して、落ち着かせるように努めるのである。子どもが望むなら、最後には侮辱した相手とうまく仲直りできるところまで導いてやるのがよい。そしてそれができたときには、彼を褒めることを惜しんではならない。そうやって、自らの粗野な傾向性を克服した気持のよい結果を、十二分に感じとらせるように努めるのである。そうすれば、後にそのような場面がまたやってきたとしても、かつて自分がうまくやり遂げたことを思い出して同じようにできるだろうし、あなたがたもまた私が信じているように、最終的に子どもの悪い傾向性を抑制するのに成功していることであろう。このようなやり方で臨むためには、子どもの教育に携わる人びとには、普通に考えられている以上に一段と巧みな技量と優れた方法が必要なのである。

さて、次に根拠の伴う道徳的非難・異議に話題を移そう。この種の非難の表象は悟性に向けて働きかける性質のものである。それは悟性に対して情念の激情の醜さを明白に伝えなければならない。激しい情念が善きもの、理性的なもの、名誉となるものと矛盾する事柄へと人を過って導くものであるとするなら、その本性の欲求は間違ったものであることを悟性に承認させる必要があるのである。けれども、こ

うした道徳的非難が向けられるのは、それなりに思慮分別を身につけ、もう既にかなり成長した子どもに限るべきであり、そして明瞭な概念を有し、理知的に判断することのできる子どもに対して用いられるべきなのである。ところで、人が物事の見かけ上の善し悪しを篩ふるいにかけて真実の価値を決定するためには、優れた哲学的な知識が必要となる。人が取り入れようとする根拠がわれわれの心を揺り動かさず、さほど説得力をもたないのなら、それはまったく役に立たないものと何らかわりがない。ただ本当の思索者だけが、根拠に訴えて激しい情念を抑止することができるのであり、学校教師がただのありふれた人にとどまるのであれば、もちろんそのことは期待しえないのである。さらに言えば、本当に高貴な精神の持ち主だけが、こうした手段によって人を改心させることができるのであり、そのような人物が真に哲学的に思索できる人といえるのである。私は既に前章で、人に正当な確信を得させるためにわれわれの扱う根拠がどのようなものでなければならぬかについて示した。それだから、私はそれを再び繰り返すことはしないで、その能力があると認められる年齢の子どもたちに、こうした哲学が明らかにする真実の根拠を教え込まなければならぬということだけを、ここで念押ししておきたい。しかし、そのさいに私が念頭に置いているのは、われわれの存在からかけ離れた物事の探究に専念する単なる思弁的哲学でなく、人間に特有の自然本性と傾向性が宿す真の本質を探り、こうした本質と結びついた物事のすべてを究明しようと努める哲学である。その学問はこれらの物事のそれぞれがわれわれの幸福（Glückseligkeit）とどのような実際関係にあるかを明らかにしてくれるものなのである。そのような哲学の知識が、情念の激情に対して適正な制限を加えることができるのである。だが、また人はこの哲学を宗教とも結びつけて考量吟味しなければならない。聖なる書は、すべての物事とわれわれの幸福との関係について、その最も正当な使命を与えてくれる書物である。その点でそれは、われわれの理性の権能をずっと超えた内容を含んでいる。それゆえにこそ、聖書が伝える美德への根拠はずっと力強いものになるのである。このことから、宗教の根拠が子どもに伝えられることを私がどれほど望んでいるかは容易に推察していただけるだろう。だからといって私は、最も僅かの悟性への影響さえも期待できないのに、理解の及ばない幾らかの信仰箇条を、子どもに信じ込ませようとするようなやり方を説くつもりは少しもないのである。宗教は決して冥想的なものではなく、何らかの活動を伴った性質のものである。だから子どもたちには、日々の糧を得る職業に直接役立つような事柄が教えられなければならないし、真の稼得能力（Verdienst）や本当の美德についての正しい概念、ならびに激しい感情の抑制への力強い動機づけを与える内容が教えられなければならない

ないのである。

そこで、こうしたことから新たに明らかになることは、教育は本来的に言えば哲学する思索者にこそ相応しいとすべき仕事であり、そもそも普通の庶民には、悪い傾向性を抑制する上で必要な諸課題を成し遂げる力量が欠けているのではないかということである。世の親たちや行政府・役所の人たちに、正当にこの事実を認識しようとする意思があるならば、若者たちはどれほど幸福なことであろうか！ 一般の庶民は教育に必要なあるべき有能さから縁遠い状態にあり、むしろ彼らが教育に与ろうとするために、かえって前よりも子どもを悪くしてしまっているかもしれないのである。

次に情念の激情を徹底して抑制する「練習」(Übungen)について取り上げ、ここでは何が重要かを見ておこう。深く根をおろした習慣の抗い難い力を認識している者は、それに自分が負けてしまわないために自制(Überwindung)と逞しさが必要であることを知っている。ところで激しい情念は、深く根を張った習慣が産み出したものと見なすことができる。一般的に言えば、その人の心情が逞しく忍耐強い性質をもちあわせていればいるほど、善良でない性質の傾向性にしろ悪い習慣〔ひいては情念〕にしろ、断然克服しやすいのは明らかなことだろう。従って、そもそも弱い自己に打ち克てるように傾向性の抑制に向けて忍耐強く、そして逞しくしてくれるものを何か求めるとすれば、それがこうした練習なのであり、どんな種類であれ練習はこの点において有効な手段なのである。それゆえに、教育においてはこうした類のすべての練習に対して特別の注意が払われてしかるべきであり、この種の練習は最も重要な事柄の一つとみなされるべきものである。それなのに、それは依然としていたるところでなおざりにされたままに止まっているのである。

けれどもこうした練習は、実に多くのところで実施しようとするれば可能であり、人が子どもと話しあう適切な方法を知っていて、彼らが快活でいるときを見つけれられるのなら、やり方を工夫しさえすれば子どもは喜んであなたがたの言うことを聞いて練習を始めることができるのである。その種の練習の一つには、例えば沈黙(Stillschweigen)を貫き通す練習がある。「きみは一言も喋らずに二・三時間静かにしていることが、一回でもできるだろうか」と尋ね、我慢してこの課題への挑戦を一度やり通せるかを聞いて、やらせてみよう。これを試みるのは自己自身に打ち克つことに真のねらいがあると、その場では一言も打ち明けないままに行なうのがよいだろう。あるときはもっと長く時間をかけて沈黙を守らせたり、あるときはきっかけを与えて話すことを指示したり、随時、何か他の事柄を我慢させたりしながら、徐々に練習を難しくしてそれを繰り返すのである。この練習はそれぞれの課

題において子どもが上達したとあなたがたが確認するまで、相当程度長く継続するのがよい。後で秘密にしておいたねらいを打ち明けて、その上でまだ沈黙の稽古をやり通せるかどうかを試してみよう。子どもが自分の舌先を確実に自己統御できるところまでくれば、彼は他の事柄にも十二分に対処する能力を既に準備し終えたことになる。こうして、練習によって子どもが獲得した自負心は、他の試みにも挑んでみよう子どもを鼓舞することになるのである。他の試みとは、例えば幾らかの自分の好みを我慢させることである。子どもはなかでも五官による感覚の満足を好む。この点で、人は子どもが感官の誘惑に負けないでいられるかどうかを、折にふれて確かめるようにしてみなければならない。おいしい果物を用意して、子どもがこの小手調べに応じてみたいと言うなら、「明日まで果物に手を出さないで、自分に打ち克つことができるだろうか。これを人に譲ってあげることができるだろうか」と問うてやらせてみよう。先ほど、沈黙の練習で示したようなやり方で対応してみるのである。他方で、子どもはまた、体を動かすことを好み、静かにじっとしていることが嫌いである。けれども、子どもはそのための練習を積むならば、それを通して弱い自己を乗り越えることも学ぶのである。また、彼らが健康であり、差し支えないなら身体を鍛える練習を課してみよう。空腹にさせ、喉の渇きを感じさせ、暑さ寒さに耐えさせ、多少つらい作業にも取り組ませてみよう。だが、そうさせるとしても、子どもは嫌がらずに受け入れて取り組んでくれるだろう。というのは、そうした訓練は無理強いをして行なわせるものではまったくないからである。そうした配慮がもしも欠けているとしたら、それは子どものために少しもならないことになる。以上のような練習であれば、子どもは勇敢で、逞しく忍耐強い心情を身につけることになり、——私は約束したいと思うのだが——後で気づいてみれば以前にも増して悪い傾向性を抑止できる有能さを獲得しているのに気づくことであろう。

ここで一つの事例として、子どもが無思慮にお喋りをするので、結果的に根拠のないでたらめを始終話すようになったという場合を考えてみよう。この悪癖も、次のような練習によって改めさせることができるだろう。子どもに彼の悪い習慣についてよく説明した後で、こう告げる。「さあ、無分別に無駄口を叩いていられるかやってみよう。きみがどれほど今日幾度となく、よく考えずに話すかを見てみるとしよう」と。それから、彼の言うことのすべてをよく注意して観察し、子どもが思慮のないまま言葉を用いた場合には約束を違えたことを明確に示し、そして彼が一日のうちどれほど頻繁に同じことをしているかを伝えることにする。次の日に、彼にこう告げよう。「昨日、実に何度もよく考えもせずお喋りをした。今日は

また、どれくらいたびたびしくじるかを見てみよう」と。そして、このやり方をしばらく継続する。もしも子どものなかに自負心や善良な衝動がほんの僅かでも芽生えてきたとしたら、このように対応すれば少しずつにせよ、確実に彼は自分の過ちを改め始めることになるだろう。

上に述べた一般的な練習に加えて、人はまた、情念の激情の抑制に直接役立つ特別な練習を子どもに試みさせることができる。ただこの練習は、先に触れた道徳的非難を用いてよい年頃になるまで行なってはならない。ここでは、考えうる他のあらゆる事例を考慮して詳しく論じることは断念しなければならないが、次の一つの事例を挙げるとするなら、あるいはそれは——特に激しい感情を抑える規則の説明には——役立つかもしれない。ある子どもが喧嘩相手に仕返しをしようという衝動に駆られていて、それでも叱責を試みれば激情を抑制したいという意欲がまだあり、またそう約束してくれることが予想されると仮定してみよう。その場合には、次のようなやり方で練習に挑戦させてみることができる。「きみに自分の感情を克服する逞しさがあるかどうか試してみよう」と伝える。喧嘩相手から最初の一撃があるかもしれないことに注意させ、興奮しないで対処するようにと戒めておく。そして、やり損じる心配がなさそうなら、わざと侮辱の言葉を彼に浴びせ、こっそりと他の者に頼んでどう振舞うかを観察させるのである。その結果、子どもが自己に打ち克つことに成功したなら、彼が立派になし遂げたことを褒めてやり、彼自身の自己抑制がもたらしてくれる満足感を十分なまでに享受させるのである。加えてまた、これと同様の練習を別の機会にも繰り返し試みさせてみることである。子どもが再挑戦に耐えられず拒むなら、優しめの罰を考えたり、いつか別の状況に遭遇しても自分の行ないを上手に制御できるようにと、訓戒を与えたりしなければならない。けれども、子どもが嫌がった場合には過酷な態度で子どもに接することがあってはならない。子どもが多くいるところでは、こうした挑戦をこなした子どもに対して、挫けず頑張り通した模範者として評価してやるのがよいのである。

だが、他方でわれわれは、こうした稽古を子どもに促す場合には、できる限り数多くの機会を設け、子どもを援助してやるようにしなければならない。また、われわれは〔普段から〕どうやって自分を律すべきかを彼らに教えなければならない。さらに、可能な限り多くの事柄に対してつねに子どもがやる気を出すように励ましてやり、困難に直面したときに尻込みしないように後押ししてやらなければならない。なぜなら、こうした試みに子どもを挑ませるためには、必ずそこに子ども本人の意欲が必要だということに注意が払われるべきだからである。要するに、どんな場合でも子どもの側に自ら取り組む意欲がないのだとしたら、何事もうまくいかな

いままに終わってしまうことは明らかなのである。ともあれ、練習に関しては多くのことを述べてきたので、これで十分としよう。

さて、最後に私は、悪い傾向性を抑止するための第三の手段について語らなければならない。ここでの問題は、嫌悪を催させる事柄（widerwärtige Dinge）に反発してそれを回避したいとする、われわれ人間の心理と深く関わっている。寓話作家パエドルスは、「成功は多くの人びとを破滅に引きずり込む」という彼自身の言葉に、次の賢明な注釈をつけている。「自らの悪癖から得た成功ほど、自堕落な人間にとって危険なものはない」⁽⁵⁾、と。ここでは何が問われているかが明らかなので、さらに説明を加えるには及ばないであろう。しかしながら、そこから真意を損なうことなく、この詩人の文章をひっくり返すこともできるのであり、こうも言えるだろう。すなわち、〔悪癖への対処にさいして〕「われわれの情念が見出す障害とその不可能なまでの抗いがたさとに向き合うことは、人の情念を抑止するよい手がかりになるとともに、その力強い手段になる」、と。人びとの経験はこの命題を裏づけており、それが意味することを説明しておくのは無益なことではないだろう。

この抑止法の活用には、異なる二つの道が考えられる。一つはまったく機械的な人間の反応をそのまま利用するやり方であり、もう一つは〔それをさらに推し進めて〕理性的な思考を促して真に自己と向き合わせるやり方である。

ところで、われわれの一定の行動に不快で腹立たしい事情が同時に存在しているとき、人は行為そのものが不愉快（Verdruss）の原因でない場合であっても、しばしばその行為自体に嫌悪の気持ちを抱くことはよく知られた事実である。この命題は何らの疑念をも抱かせないものであり、幾つもの例証を示すことができる。それらの思いつくなから、ある友人が私宛に知らせてくれた事例を一つだけ挙げておこう。一人の若者がいろんなガラスの表面を加工する工芸創作に殊の外熱意をもって挑み、熱心にその技術を習う練習をしていた。彼が作業に取りかかっていたあるとき、ひどく不愉快な感情を抱く知らせを受け取った。そこで彼は機械を動かすのを止め、その場から立ち去った。だが、それ以来そのガラス加工に対して彼は、以前にあればほど愛着を抱いていたにも拘らず大きな嫌悪感を覚えるようになってしまった。当人にとってなぜそうなったかの理由が分からないままにである。これと似た事例を私自身に置き換えて補うとするなら、普段私が大変愛好していたチェスでもかつて同じことが起こった。そのときもそれに先立って、たまたまある不愉快な感情に襲われる経験を私はもっていた。少し経って気がつくと、その後私がチェスをするときには、なぜかいつでも一定の不愉快な感覚が甦るようになってしまったのである。どうしてそうなったのかというと、その理由もまた簡単に分かるのであ

る。人がある活動をしているさいに、精神が一定の不快感を抱き続けたことで、後になって想像力がつねにこの二つの出来事を同時に結びつけて思い起こしてしまうのである。そしてこの〔認知的〕連合が本人には明瞭に自覚されていないために、人は二つの事柄を正しく識別することができず、自らの不快感はそこで同時に継起していた外的状況が原因であると、想像力の仕業で誤認してしまうのである。そのときに、たとえそれが真実ではないと気づく状況においても、われわれは想像力の圧倒的な力に屈しやすいのである。こうして人が顕著な不快感に一度なりとも見舞われることがあった場合には、後で特定の事柄への嫌気をたびたび持つにいたるわけである。ここまで述べたような理由で、人間においてそれはまったく機械的な過程を経て生じるのである。

さてこうしたことから、われわれが情念の欲求充足の企てを巧みなやり方で心理的不快と結びつけて対処するなら、それらの情念を折々に抑え込むことができるという結論が得られる。ある泥棒が盗みに入りたいと思い、行為の最中に起こった予期せざる騒音を幽霊の仕業と思い、肝をつぶして平静でいられなくなることを想像してみよう。こうした状況下ではきっと窃盗の意欲を当人からすっかり奪ってしまうに違いない。従ってこのことから、子どもが粗悪な情念を静めたいという意欲をまだ持たない年齢までは、われわれが不快に感じる何かを連想させるやり方で子どもを動機づけることができれば、彼らに望ましい影響を与えることが期待できるのである。ただそのさいに、抑制したい情念と嫌な厄介事を故意に結びつけようとする大人の思惑を、彼らには気づかせないように注意しなくてはならない。というのは、子どもにとってその厄介事は「罰」(Strafe)に置き換わる可能性があるからである(ちなみに、子どもの罰についてここではまだ詳しく触れないでおこう)。このような理由で、物事の秩序の要請から子どもへの罰が必要とされるとき、子どもは結果的にそのつど嫌な出来事に出会っていることになる。だが、そうだとすると子どもは状況に応じてそれを自然なことと受けとめていなければならない。子どもはしばしば自らの情念の赴くままに欲求を充足しようと振舞うことがある。けれどもその場合でも、最後には自分の思うようにならず手痛い目にあうのである。だが、そんなときにはわれわれはいつでも随時、子どもに忠告をして援助してやらなければならない。「こうした悪い性癖が結果としてきみにどんなことをもたらすか、分かっているかい。いつだってこんな結末は嫌だと感じるのじゃないかね。けれども、こうなるより他に、それはどうしようもないことなのだよ」、等々。

ときどき人はまた、自らの情念に多くの障壁の妨げを設け、その満足な充足ができないように阻むことができる。そして、そうすることによって人はまた、子ども

により影響をもたらすことが可能なのである。というのは、子どもが自らの情念を満たすことがほぼ不可能だと分かるなら、すなわち、その欲求に屈することでむだに苦痛を感じるが増え、絶えざる重荷を引き受けて苦しまざるをえなくなることをよく理解するなら、彼らはそれから逃れようと努めるはずだからである。このようにして人は、例えば功名心の誘惑に負けないようになるのである。だから、子どもが大それた願望に執着すればするほど、褒められることを少なくしなければならぬ。また、たとえそうした誘惑が身近に存在しているとしても、われわれはあたかもそれに気づいていないかのように振舞わなければならない。同じように、人は〔青年期に特有の〕浮かれ騒ぎや情欲の衝動にも、強力な障壁を設けなければならないだろう。だが、これらの誘惑に関する規則はあまり一般的なものとはいえない。それがどのような影響を子どもにもたらすかを知るには、それ相当の伶俐さが求められるにせよ、それでも人はその種の賢さを身につけさえすればいつでもこれらに対応できるのである。

以上において私は、不愉快な事柄への心理的葛藤を利用すれば、厳密で分別のある手段の活用によって情念の抑止が可能になることについて述べてきた。だがこのことは、私の見立て通りなら、普通よりは粘り強い悟性を身につけた人間が、次のようにして実行していけるのである。ある一部の人間は、大変欲望の強い性向を生まれつき有している。だが、そのような者であっても、情念を満足させる行為に対していろいろなやり方で最強の制御の手だてを講じる環境を用意できるなら、それに耐えて順応し自己制御できるのである。かりにその努力がなされないとするなら、欲深い情念はただ当人を苦悩させる責め苦として役立つだけであり、彼を満足させる結果には到底いたらない。だが逆に、そうした抑止の手立てがうまく整うなら、そのとき彼は自らの悪癖に対して反省を試み始めることになる。これまで漠然と思い通りになると考えていたことが決してかなわないことを知れば、彼は自力で解決する手段を探し始めなければならないのである。そのとき彼は寓話におけるキツネとなって、手中にできなかった対象を軽蔑の眼差しで捉え直さざるをえなくなる。そこで彼は、これらの情念を一層蔑みの対象と見なすためにあらゆる根拠を集めて考え抜き、そして最後には、それ以前に大層執着していた自己の欲望の真実を認識するにいたるのである。人間を改心させるためにこうした力づくの手段と困難な障害をしばしば創造主が用いられてきたことは、聖書を読むなら容易に明らかになる事柄なのである。

これまでこの章では、三つの手段を用いて悪い傾向性を抑止する必要性を述べてきた。〔こうした課題に立ち向かうには〕人が知慮（Einsicht）と豊かな技量

（Geschicklichkeit）を持ちあわせていることが欠かせない。われわれは少なくとも最終的には、〔教育が抱えるこうした諸課題を引き受け〕その目的との関連で何らかの成果を導き出さなければならない。だがそのためには、現状において子どもの教育を職務とする人びとに欠けているこれらの資質をより一層高めていくことが、まさに今求められている重要な課題なのである。

【訳注（第6章）】

- (1) この前後で使用されている *die Vorstellungen* には、主として「非難・異議」の訳語をあてた。「表象」と訳すべき箇所もあるが、多くの場合「表象を通して」は「非難・異議などの表象を通して」という文意になっており、ここでは道徳的是認の対義語である「道徳的非難」にむしろアクセントを置いた訳出が適当と考えた。ズルツァーは概ね経験の想起や想像の働きによって生じる心の意識内容を「表象」の語で表現するが、本章の情念抑制論では子どもの道徳的成長を、周囲の大人との日々の関わりの中なかで過去に受けてきた道徳的非難・是認の経験を自らの表象機能を通して内面化していく過程と捉える立場から論じている。
- (2) ここはオウィディウスの代表的な作品『変身』からの引用。プブリウス・オウィディウス・ナーソ（Publius Ovidius Naso, 紀元前43年－後17年頃）は、皇帝アウグストゥスの時代に活躍したローマの詩人。多数の叙事詩や神話の物語を著した。ここで引用された『変身』は、新しい解釈を加えてギリシア神話を集大成した大作であった。フリードリッヒ・マン編集『教育古典叢書』第45巻（1922年）の翻刻本におけるW.クリンケの注解では、出典箇所を〈Ovid, *Metamorphosen*; 7, 20 f.〉と記している。
- (3) ルドヴィグ・ホルベルグ（Ludvig Holberg, 1684年－1754年）は、ノルウェーの作家・哲学者。コペンハーゲン大学の学長も務めた。主著に『エラスムス・モンタヌス』（1723年）、『自然法と一般法』（1736年）、小説『ニルス・クリムの地下世界への旅』（1742年）、などがある。ここでの引用は、1722年から1728年の間にデンマークの公共劇場で演じられ好評を博したホルベルグの喜劇作品からのものと見られる。
- (4) ホラティウス（クイントゥス・ホラティウス・フラックス, Quintus Horatius Flaccus, 前65年－前8年）は、ローマ帝政初期の詩人・作家。ローマ人の日常的な会話を題材に構成した『風刺詩集』、有力者マエケネスに宛てた『書簡詩』などを著した。詩作では平和なアウグストゥスの治世を称えたり、中庸の度をわきまえた人間生活を謳った。「征服されたギリシア人は猛きローマを征服した」、この『書簡詩』における一節は広く知られている。邦訳文献に『ホラティウス全集』鈴木一郎訳、玉川大学出版部、2001年がある。
- (5) パエドルス 既出、Ⅲ(9)。パエドルス／パブリオス著、岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』国文社、1998年、63-64頁参照。『解放奴隷パエドルスによるイソップ風寓話集』第三巻に収められた「アエソプスとずうずうしい男」の標題を冠するこの寓話は、人に石を投げて金銭を脅しとる悪癖をもつ面の皮の厚い男が、その習癖を見てとったアエソプス（イソップ）の誘いにうっかり乗った結果、有力な金持ち一行に石を投げる危険を冒し、あっけなく捕縛され磔になった話である。悪癖化した人間の習慣はその人から冷静な判断力を奪い、ときには軽度の悪習でさえも自らの身の破滅を引き起こしかねないと論じている。

原典：J.G.Sulzer, *Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder*, zweite, stark vermehrte Auflage, Conrad Orell und Comp, Zürich 1748. (Kapitel 6, S.128-147.)